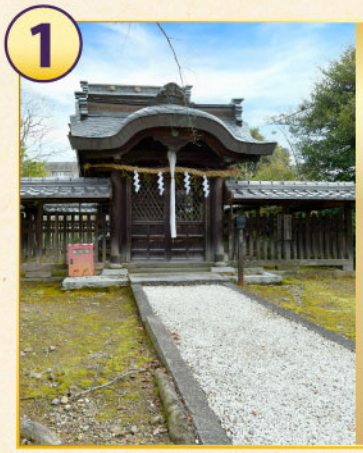
亀岡に残る城下町 散策古地図

亀岡の街並みは、光秀公が築いた頃からもちろん変わってはいますが、城下町の形はほぼそっくり残っており、少し歩けばまだまだ当時の面影が残っている場所がたくさんあります。城下町の面影と亀岡の歴史をしのびつつ散策してはいかがでしょうか。

1 形原神社



明治13年(1880)に旧藩主を偲んで創祀。随所に施された「八丁子」の紋は、名前の由来となった形原松平氏の家紋で、かつては丹波亀山城の「大手門」が配置されていました。

2 亀山城惣構跡

外堀の南側に広がる城下町を防御するために三重目の堀(惣堀)がめぐらされました。その際、堀り上げられた土を土手状に高く盛り上げ、土塁が築かれました。

3 古世親水公園

三ノ丸と中級の武家屋敷や町屋が配された城下町を画する外堀に当たり、昔からこの湧き水を生活用水として、炊事・洗濯などに利用されています。

4 古世地蔵堂

平安時代の武将源頼政の守り本尊を祀ったお堂。禁裏に現れる鵺を退治した頼政は、帝からは褒美として獅子王とよばれる御剣と丹波に領地「矢代荘(矢田荘)」を賜りました。

亀岡祭山鉾〈 各山鉾説明文 〉

亀岡祭（京都府登録無形民俗文化財・亀岡市指定無形民俗文化財）

丹波の祇園祭とも呼ばれる亀岡祭は、和銅2年(709)に創建された鍬山神社の祭礼で、大堰川の氾濫による水害や干ばつなどの災厄除けと豊かな実りに感謝して行われてきました。

戦国時代の混乱の中で一時途絶えましたが、その後歴代城主の庇護のもと神社が復興され、祭りも町衆により延宝9年（1681）に再興しました。江戸時代の中期になると町衆が日常生活の中で倹約に努め経費を捻出し、それまで舁き山であった山鉾を曳き山に改修するなどして祭りを発展させた事が「引山記」などに記されています。

亀岡祭は10月23日（宵々山）、10月24日（宵宮）、10月25日（本祭山鉾巡行）の3日間を中心に約1か月間の日程で行われ、中国や朝鮮、北欧などからもたらされた染織品や京都西陣の綴錦など豪華な懸装品をまとった11基の山鉾が城下町を巡行するさまは、町衆の心意気を感じさせると共に、貴重な民俗文化財として今に伝えられています。

翁　山（三宅町）

能楽の演目「翁」を題材とした風流造山で、黒色尉と白色尉の面をご神体としています。「翁」は、別名「式三番」とも呼ばれ、子孫繁栄、国家安穏、五穀豊穣を祈る祭儀的な意味合いを持ったもので、正月や祝賀に演じられる演目の冒頭に演じられることから、翁山は、宝暦（1751～1764）の末ころまで鬮取らずの1番山として巡行していました。一時途絶える事が有りましたが、文政12年（1829）に再興されました。再興に際して、当時の最高級の織物であった京都西陣の大型綴で前懸幕、見送幕が新調されました。

浦島山（呉服町）

『丹後風土記逸文』や『日本書紀』、『万葉集』、『御伽草子』でよく知られる浦島伝説を題材にした風流造山で、ご神体は釣竿をもった浦島太郎と亀であらわされています。

山懸装品で注目されるのが、中国から樺太を経由して松前藩にもたらされた「蝦夷錦」と呼ばれた中国清朝の皇族クラスが着用する官服の原反が天水引に仕立てられています。この水引幕は、京都に出て成功した熊野忠兵衛が「梨花白鹿寿老人図」刺繍の見送幕と共に寛政11年（1799）に寄進したものです。

高砂山（柳町）

能楽や謡曲の演目で知られた高砂を題材にした風流造山で、相生の松に寄せて夫婦愛と長寿を愛で、人生を言祝ぐ吉祥を表し、「尉」と「姥」をご神体としています。
高砂山は「高砂山人形幷山道具入」の箱書に見る宝暦5年（1755）頃に舁山として建造されたと書かれています。文政8年（1825）に鉾に改装され、同時に「異国人図」を描いた京都西陣の大型綴の見送幕や前懸幕、水引幕が新調されました。

稲荷山（旅籠町・新町）

五穀豊穣、商売繁盛、福徳開運の神である稲荷神（宇迦之御魂神・倉稲魂命）が稲穂を天秤棒で担う姿をご神体とする稲荷山は、「稲荷山御装束」の箱書き銘により、寛延4年（1751）頃に舁山として建造されたと書かれています。「虎に仙人図」の見送幕は、当時の最高級の織物である京都西陣の大型綴で、町衆の心意気を今に伝えるものです。また、背中に「稲」の文字をあしらった渋染袢纏は、山の総指揮をとる世話方の衣装として伝わっています。

武内山（紺屋町）

『古事記』や『日本書紀』では、景行天皇から応神天皇の5代に仕え古代ヤマト王権を支え、360歳の長寿とされる武内宿祢が、神功皇后の三韓遠征後宇佐宮で出産した応神天皇を抱いた姿をご神体としています。武内宿祢は、並外れた長寿と功績により延命長寿、武運長久、厄除けの神とされています。

鉾頭には、三韓出兵の際に荒れた海を鎮めた干満珠（如意珠）が飾られており、文化4年（1807）に百人講合力により新調された「紅地雲龍文様繻珍錦」の見送幕は、中国清朝の皇族級の人が用いたタペストリーで貴重な織物です。

鍬　山（北町）

丹の湖であった亀岡盆地の南端の黒柄山に降臨し、一艘の樫舟に乗って浮田の峡（保津峡）を鍬で開削し肥沃な耕地を造ったとされる丹波開拓の神、鍬山大明神（大己貴命）が鍬をもって立つ姿をご神体としています。明和2年（1765）には曳山の明神山として記載されていますが、寛政11年（1799）には囃子を伴った舁山となり、以後舁山として伝承されてきましたが、町衆の熱い思いにより平成17年に再び曳山として再興されました。

現在伝承されている懸装品の大半は、文化8年（1811）に新調されたものです。見送幕や前懸幕は、京都西陣の大型綴を用いており、往時の町衆の国際性や心意気を感じさせるものです。

羽衣山（西竪町・東竪町）

三保の松原に伝わる天女伝説を題材とした能楽や謡曲の演目である羽衣に基づいた風流造山で、地上に舞い降りた天女と白龍という漁師の二体をご神体としています。明和2年（1765）の行列帳には曳山として記載されており、亀岡祭山鉾の中で最も規模の大きなものだったと言われています。

昭和初期に老朽化等により部材の大半を失いましたが、鉾の復興を悲願として町衆の熱い思いが結集され、平成11年に囃子を復興。さらに平成14年に鉾の躯体を復元新調され、懸装品についても大切な花嫁衣裳の提供を受けて、町衆が手作りで完成させたものであり、復興に寄せる熱意と心意気を感じさせてくれます。

難波山（矢田町・上矢田町・京町）

能楽の難波を題材にした風流造山で、応神天皇の時代に『論語』『千字文』すなわち儒教と漢字を伝えたといわれる王仁をご神体としています。王仁が仁徳天皇の即位を祝して「難波津に　咲くや此花冬籠り　今は春べと咲くや此花」の和歌を奉った故事を表しています。

『引山記』によると、寛政11年（1799）に曳山に改装された時のことが、「町中が、えいやえいやと引山に、なおすも神のちからなりけり」と町衆が心を結集して10年間にわたり祝儀・不祝儀・諸普請を問わずに質素倹約することを申し合わせて経費を捻出しました。

蛭子山（塩屋町）

釣り上げた大きな鯛を抱えた豊満な恵比寿（蛭子）像をご神体としています。この蛭子神は、伊邪那岐命と伊邪那美命の国生み神話で最初に生まれた子で、古くは海の神として豊漁や航行安全、交易の神とされていましたが、後に市場の神として商売繁盛の福神となり、七福神にも数えられ、後には恵比寿、大黒と並び称される福徳の神として広く信仰されました。山を飾る懸装品の中で、三人のオランダ人と異国の風景を描いた見送幕は、鎖国の時代にあって、異国の風を感じさせる風流の意を余すことなく表現した京都西陣の大型綴であり、町衆の心意気を彷彿とさせます。

三輪山（本町）

大和国の三輪山麓に鎮座する大神神社の祭神である大物主神（大国主命）をご神体としています。その姿は、能楽の「三輪」で演じられる後仕手の女神像として表されています。

明神鳥居の両脇に小規模な二つの鳥居を組み合わせた三ツ鳥居は、三輪鳥居とも呼ばれ、大神神社拝殿の奥に建てられ、そこから御神体山を拝む古代祭祀の形態を残す大神神社独自の鳥居形式です。三輪山鉾の正面には、この三ツ鳥居が掲げられご神体を拝む形となっています。山鉾を飾る懸装品には、京都西陣の大型綴の前懸幕を始め、イギリス製の胴懸幕、インド製の見送幕、中国清朝の官服の胸背刺繍を繋ぎ合わした水引幕など国際色豊かなものです。

八幡山（西町）

永万元年（1165）に氏神である鍬山神社の御神体山である天岡山に降臨した誉田別命（応神天皇・八幡神）をご神体としています。天保12年（1841）に曳山に改装するに際して町衆が諸事倹約の申し合わせをした文書も残されています。山鉾に寄せる町衆の祈りと願い、熱い思いと、心の結束は、今に引き継がれています。

また、金箔を押した日輪を鉾頭とする真木には、風流造山の題材となった八幡神が降臨した姿に由来して、弓矢を飾り付けています。